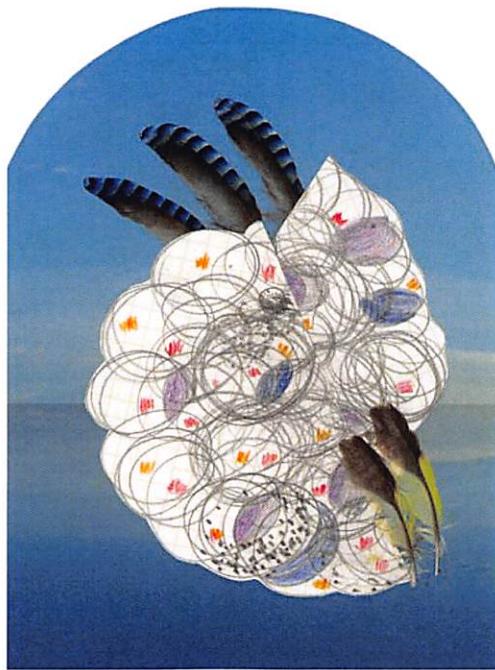


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 8



令和3年8月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第8号

No.759

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一〇二一年 八月号 (通巻七五九号)

◇今月の二十首詠 …… めぐりあはせ

磯田ひさ子 2

■作品[A]

松永智子・松瀬トヨ子他

関根和美 60

A C B A

松本多摩子他

47

茂木静子他

66

森田泰子他

61

後藤元子他

48

■オリーブ集

紺野紘史・酒井 牧

18

◇今月の二人

柳澤君子・赤堀敦子

89

香川進の生きものの歌 34

田土成彦

15

私と短歌との出会い (228)

佐々木のり子

19

■杉浦時子歌集「白鳥伝説」批評

奥田陽子

34

蝶となりこの庭離れぬ
だから踊って歩いてみせた

柴田登志恵

89

◇シルクロード・カフェ —————【責任編集】木村文子

クリップ 92

神田通信 表3

■遊覧寄港 <先輩に導かれて>

下村とり子 46

44

長く見つめて

高尾恭子 60

■歌壇月旦

遺骨のゆくえ

47

■六月号作品批評

66

A …… 三浦好博・高津砂千子

千葉む津・茂木 畔

B …… 山本 孟・若林美知恵

C …… 谷川節子
オリーブ集……近藤芳仙

18

久我田鶴子

89

〔編集部〕

90

高尾恭子・久我田鶴子

90

めぐりあはせ

磯田ひさ子

東日本大震災の一年後開業したり東京スカイツリー

ただならぬ大震災に開業のテープカットの人も減らしぬ

他を痛む心のあれば日本はまだ大丈夫と思ひたりしが

良識の解釈変はりとめどなし人も企業もとりわけ政治

下町の空を押しあげ居ごこちの悪さうなりき東京スカイツリー

建物も組織も機能しととのふは十年と思ふ やまばふし咲く

十年を迎へ景色に溶け込みぬ東京スカイツリー白銀の塔

寡黙なる挑戦ひかり下町のランドマークに成りおほせたり

| |
|---------------------|
| 昭和二十一年生まれ。 |
| 昭和五十一年「地中海」入社。 |
| 森の会所風。 |
| 歌集に「辺境」「万葉」「狼若」「遙る」 |
| がある。 |

立ち尽くす一本の塔 月のなき夜はひそかに身ぶるひをする

十年後いかなる街になりてゐむわれにあるかや後の十年^{のち}

ある日ふと消ゆるもあらむ人もわれも余命といふは計り難くて

隅田川に新しき橋かかりたり浅草とスカイツリーを結ぶ

足下の流れる川を見つつ行く「すみだリバーウォーク」出来たての橋
コロナ禍のさ中に完成したる橋自肅の渦にうづくまるやう

ふたたびの禍事^{まがこと}に遇ふ落成は三月十日のめぐりあはせや

コロナ禍の生みたる言葉 巣ごもりにおうちごはんにいささか寂し

長引けば一すぢ白きマスク焼けマスクはワクチン 通行手形

スカイツリーの下に広ぐる町若く 空^{ソラ}マチ 水^{ミズ}マチ 駅ミセもあり

亡き人にまみゆる思ひに仰ぎたる桐の筒花いつしか散りぬ

下町のスカイツリーをけぶらせて夏のはしりの雨しろく降る

作品 A

松 永 智 子

あかとき
あかとき

・嵐

あかときの光射しくる窓に見る衢おとなく行く人の影
午前六時このあかときの日のひかり音なき衢を斜めに射しくる
うごくもの何もなくして音いまだあらずあかとき衢あけゆく
わが窓にいまだ光のあらずしてむかひのビルに射しくる朝光
人の声車の音のなく明くる休日の朝人ひとり行く
六階の窓の障子に射す光呼ばれたることカーテン開く
こころ瘦せ身もやせ夏のすべあらず見るのみにしてときのすきゆく

松瀬トヨ子

茜

・沖

朝の樹にじーんじんじん活氣あり蝶々は花に口付けをする
この路地を抜け道となす月桃の花房ゆらす生温き風
いっせいに咲き盛りたる鳳凰木基地なる島の路地明るくす
ニライカナイの海におぼれゆく太陽の茜を憮く島の陽まぶし
太陽が彈けたようなこの暑さクーラーの冷えに睡魔がおそう
二波三波さざ波あら波リバウンドあやうき言葉コロナの季節
目に見えぬウイルスに迷いこもる夕ひそかにきこゆ犬の遠吠え

牧 雄 彦

五月雨

・大

「國民のために働く」といふボスター首相の顔を五月雨が打つ
川岸のなだりに生ふることまりの小さき花が雨粒を吸ふ
五月を受けて生き生き咲く白きじふやは庭の星とかがやく
じふやくの花の白さをきはだたせ五月の庭明るかりけり
ひと雨ことに太りゆく実をかざしつつ枇杷の木の葉のみどり新し
枇杷の葉の古きは落ちて新しき小さきみどりがつやつや光る
また少し大きくなりたる枇杷の実のうぶ毛が光る梅雨の晴れ間を

松浦禎子

書家

・羊

雲水のくるま目の前をすきてゆく黒衣の袖を少しゆらして
飛び交える鳥の謡歌につつまれてひと日過ぎゆく歩のあればこそ
仏殿の廂の巢より行き来する鳥はこの世に種を残すため
老樹にて成りし柱に身をよせて今日持ちきたる巣を放でり
諺に「坐れば牡丹」ぱってりと大輪ひらく大杉の根に
天井に描かれし竜の跡より吊されし灯ほのかにともる
書家翔子筆立ちあげてひと息に父に捧げる「佛心」二字

三浦好博 トリアージ

・鉢

生きゆくは資を負ふもの何一つ我を責めないいきものと生く
ワクチンの接種にあるトリアージ態度でかいぞ高齢者我ら
五輪旗の色またコロナのトリアージのちは重し命は軽し
限界の医療現場ゆ「やめて呉れ」五輪は密ぞマークは五密
悪者にさるる夜の街居酒屋の友は言ひたり「コロナ、夜行性?」
「男の子でもがまんせんと泣いてもいいんやで」本当に泣き出したのだ
盗人と間違へらると妻を止む散歩の途上の美しき庭

宮本靖彦

山法師

・凌

コロナ禍の散歩に見つけ家の中庭に五月の花あまた輝く
六甲の裏谷に咲くやまほふし今も清流飾りて居るや
裏六甲に山法師貰でし友どちは山星となり永久に山守る
磨硝子に映る棕梠葉の大ゆれにコロナに揺るるわが国の見ゆ
天覆す深夜の雨に目の冴えて妻と語るは古友のこと
隣家の紅バラに昔勵まされ今ホワイトに心癒さる
古書店に邦雄が「赤光百首」見つけ躍る我が胸時計よ止まれ

三好聖三

あいつ

・伊

ふるびたる麦藁帽子もたよりにて炎天の土鉄に起こせる
土起こしすれば間なくやつてくるイソヒヨドリのあいつとこいつ
喫煙は水道のよこ擁壁に凭れて見入るヒヨドリの嘴

猫の尾を鉈で断ちたる祖父のこと聞きつつ思う血筋について
傷つきし猫を捨てにゆく夢に覚めて強張るかがむ身体は

源氏バイ食べても歌は繼まらずモリアオガエルを聴きにゆくかな

芸術はつまらぬものと彼は言う「帝國大學新聞」の隅

御代田澄江 背姿

・茨

長姉住める都市の施設ゆ朝まだ電話の計報姉みまかりぬ
コロナ下の看取り能はず独り逝く姉肺炎にて苦しからまし
大動脈解離ゆ生還虫歯は無しと彼の日胸張りしも寂しさありけむ
姉の長女乳がんにて母より先に逝く思へば姉は長女の許へか
近くに住む親族九人の葬送に次女取り仕切り永の旅路へ
初七日に夢に来し姉背に負ふ赤子「姉さんおんぶ代ります」と手を伸ばす
うそ寒き我が背をかかへ毛布かかへも一度洗濯機を回す日長を

茂木斌

接種約

・埼

ああわれの歩く姿はおちいさん一〇〇%かなしけれども
山中の塩の井戸跡訪ねゆく塩坂峠十四年ぶりに
出会ふ人ひとりもなく静かなり峰の口にギンランの咲く
佐野ラーメンおぐらや臨時休業に富士山ナンバーすごすご帰る
われも又おぐらやラーメン食ひ損ぬ土曜日なるに臨時休業
ケイタイに取り込むアブリまた一つゆうちよPAYなり使ふ日あるや
ワクチン接種予約のすみて和苦鎮の字を当て禍より逃れし気分

もとむらしげと

仏

・そ

我の知る母の一一生を浮かべおり午前三時の果てなき静寂
ジケソーレ解いて笑みし去年の夏仏となりしよ今宵の母は
実家にも病院にも母は居らず思いのゆき場をなくしたる朝
ジケソーレの一片欠けて見つかず六十余年はまりいし母
母の居ぬ家に来れば四匹の猫があつまる餌を求めて
帰ること信じて入院せし母の日記炬燧にいつものよう
母の死を告ぐれば涙する人の「優しかった」と日々に言つ

山 下 雅 子 富 士

・習

養 学 登 志 子 季 の う つ ろ い

・凌

・凌

雪まとう富士泰然とさわやかなり車窓の左に右にあらわる
ゆきゆきてゆるき上りに変わりゆくしだいにマスクが邪魔になり出す
歩みきて園のベンチに味わいぬ爽快感と脱力感を
ボール蹴る若き二人の叫び声「うめえー やべえー」は理解に間あり
車窓より小さき手を振り「おばあちゃん」ベランダ越しのコロナ面会
やきとりやからあげ好むひ孫達コケコッコーの鳥は知らぬと
歯切れよき都知事宜う「ワクチンはゲームエンジャーニー」耳朶にひびけり

雨

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

雨の中少女は一人傘をさしバラ園のぞき姉を待ちおり
梅雨なかなば晴れ間掘り上ぐジヤガイその大小を分く御天道様
うねを立てサツマイモ植う梅雨なかなば孤独に耐うどノートに書けり
三脚の上立ち上がり天つかむ梅の実かおり胸のときめく
孫三人あおぐ視線に老体を締めつつ梅をそっともぎやる
梅雨早き田んぼしろかき顔を出す蛙とび逃ぐ睡草の中
雨の中田んぼ一斉トラクターエンジン音に龜逃げまどう

山 本 孟

・大

吉 永 椎 昭

代表質問

・熊

窓に見るじねんの草木なだりにて季のうつろい折々に得て
コンクリート直立にして埋めたてぬ蛇も土筆も家々の底方
目覚めたるよろこびの翅打ちふりつつ少なくなりし日暮の蝙蝠
Tシャツはミックキーマウスオーケストラ練習風景尾高忠明
マスクかけ無言のままの男達等間隔に釣糸たる
土儀割りし力士はややに上を見る感慨あまたよきるのだろう
樹は老いて神代と人の世を隔ててさわらさわさわ語る末の世

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

ヘアダイの姿は人に見せられぬ前後左右の髪逆立てて
染め上がるまでをラップに頭を包み「家庭画報」を捲りゆくなり
繰りゆけばファッション、スイーツ、宿めぐりわが身をページにすべり込ませる
シャンブーラー台に横になりつつ目を閉じぬ心の中を覗かれぬよう
クラシックBGMの流れいでシャンブーラー台に憩うひとと
手際良くハサミにカットされてゆき今が一番素適なわたし
颯爽と一步踏み出す美容室変身願望まだ裡に秘む

山 本 孟

・大

吉 永 椎 昭

代表質問

・熊

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野 幸 司

・沖

横 田 敏 子

美容室

・福

山 野

磯田ひさ子

左巻き

森

奥田陽子

もるさわようこ

大

介護施設に友入りてより一月余わが不機嫌のもとと氣付きぬ
山ふちの花よりもまづ名に惹かる金の名札に「繁カピタン」
カピタンはいづこの國をめざししや友の乗りたる船還らざり
山ふちのからみ合ふつる左巻き友の矜持の堅さなつかし
左巻きのつる憎からず友とわれ偏屈な性と笑ひ合ひたり
居るだけで樂しかりしよふぢを見に大会に行き一緒なりしよ
わが知らぬ施設のたよりにマグカップ片手に笑ふ友の姿あり

梅本武義

梅雨入り

羊

小野雅子

希ふ

大

梅雨入りの夜を鳴く蛙聞く眠り歴史に残る令和三年
夜半の雨聞きつつ思う遠き日よ今なら迷わぬことの数あり
衰えを言いつつ動く妻と居てわが衰えは言わず動かず
リュック負うくの字の妻に譲られる席の隣は自ずと我に
女生徒に席譲られてのわが態度上から目線というが気になる
サクランボ三粒ほど食べ孫は去り我と鶴とがしばし留まる
八年を細く繋がりまだ社員勤続五十九年が来る

大浪美雪

すぐそ

森

ビデオにて見る運動会 法被着でソーラン節をはだしで踊る
力強くふんばる脚と空を指す腕 みどりの茂り渡き木々
みきひだり交互にずれて揺れ踊る都会の子らの素足うつくし
マスクして踊る子どもに胸ふかく息吸へる日の来るのを希ふ
輝きて翔び去る人か残りたる人が勝者か五輪の近し
公園に着ていったシャツ吊るされてあの時はもう戻つてこない
ありがたき「船橋方式」接種券來た日に医院で予約が取れる

神田鈴子

明けぬ夜は

大

山裾を大きく廻るや幾羽もの小さきちさき燕飛び交ふ
「すぐそこ」と里人の言ふ街道を往きては戻りまた道を訊く
しるむらさきしるむらさきと木蓮の枝組み交はす山道下る
目の限り草ひとつなくほくほくと耕されたる試作地展がる
桜はや三月なかなばに開きたり何をそんなに急ぎをるのか
ウイルスに見つからぬやう声立てずまばらまばらに桜見る人
古墳なる丘の頂一本の山桜あり白き花ちらほら

画面へと吸い寄せられぬ久しくも見る事無かりしもろさわようこ
今もなお氣骨をしめす風貌にもろさわようこ九十歳を越ゆ
読みたるは遠き日なれど忘れ得ぬ『信濃のおんな』名著なりしを
長き歴史の節目節目を生き抜きおんなひとりの証言の声
ようやくに得たる一票と語りいる遠き日なりし婦人参政権の頃
一票の平等を語り搖るがざる言葉ありて今日憲法記念日
ジエンダーの議論なさるる令和の世かの研究家は九代を生く

菊地栄子 えんどうの花

・ 湾

歯切れよく初々しくも清らかな今朝のうぐいす扇を開けて聞く
幾つかは若くありません。昨日今日夕の歩みを追い越しゆけり
健気にも供をしくる有り難さ履き慣れた靴履き尽くす靴
素足にて触れし床板の冷たさよ親しくなずむ五月となれり
この街も古びゆくらし見渡しの櫻の幹も老年期過ぐ
周りには真っ赤に花びら散らしてた奮い立たせて匂える椿
種蒔きの遅きも杞憂に終わるらしえんどうの花一齊に咲く

北山雪男 残日抄

・ 伊

ネット川流れて以後の幸不幸、語る川辺に翳る風はも
いつにも話せばわかる訳でなく耳斜に構へ聞く陰謀論
胸底に錆びたる火縄銃ありてときに嘆きの弾込めてみる
終電に熟寝の戦士 頭といふ個人情報せつなく曝し

ねんごろの膝そして膝つと立ちて夜に消えたり無人駅より
余生にはオフライン良し吾を誇る風に知らぬが仏決め込み
流行物ゆ落ちこぼれたる老骨がひねくれ坂に閑居して 梅雨

木村文子 湯水の杜

・ 羊

山ウドがかごに盛られて店先に 賑わいのなき町を歩みぬ
羽ばたきは鋭く我を威嚇する鳥はどこかに雛を持つらし
蹴られると思う間もなく蹴られおり敵ではないよ歩いているだけ
海に生れし清きものたち黙じる屈いだ今日の新浜の海
泣きそうな笑顔の汽車が走りゆく廢線となる明日は雨なし
浴槽のゴム栓抜けば真ん中に空気を立てた湯水の杜

取れかけのボタンを一つつけかえて今日の仕事はおしまいとする

草刈十郎 ランドセル

・ 春

一年生小さき体にこれから不安も期待も背負ふランドセル
春愁や一つひとつ春灯のコロナ禍の世に点るはかなさ
卒寿まで命ながらへ今日もまた亡き人ばかり思ひ出すなり
花めづるいかひとりとなるふたり飛行機雲は一直線に
風の来て光を弾く若楓長閑なるけふもコロナ禍のけふ
はつなつを先取るごとく草若葉繁茂し隠す小径一本
先行きの短き人生ワクチンを待ちつつ夏を老いとたたかふ

國井節子 青き風

・ 春

明日香なる食のデパート道の駅サンディッチと真つ赤なイチゴ
明日香路の古きをたづねサイクリング昔はなかつた文明の利器
森の木を吹き抜けて来る青き風この道ゆけば古代とつながる
ほの暗き古墳の壁の美女の絵の長きスカートひるがへしたり
明日香路は石の都ぞ二面石、猿石、亀石、鬼のまないた
地図になきあの道この道ゆきくれて古墳の穴の靈気にふるる
散り落ちしつじの花を惜しみつつ心身共に癒されてをり

河野繁子 あの頃

・ 雅

ねき坊主、蓬の天ぶらに食は足りて今日は今日なる風に委ねて
二十日ほど早き梅雨入り報じられ摘み急ぐ茶のやわき手ざわり
ケーンケン朝の挨拶受けながら茶摘みの耳は自然と遊ぶ
時惜しみ茶摘みのできぬ遠き日は職うごと懸命なりし
水の上歩むがごとく人ゆけり水張田しづかに雲など留め
あの頃は良かつたという頃はなし置かれた場所に咲くには咲いた
じろじろと我を見つむる人のいて孫の編みたるマスクに気付く

小林能子

コロナにめげず

・羊

坂上直美

納骨

・天

描かれし十葉は白くしづもりて往来に雨ふり荒ぶ午後

飛沫除け透明板越しマスクしておしゃべりは今日もコロナにめげず

珈琲に「バステル」は伊勢ブランラではと互ひにコロナ終息の夢

海水浴の思ひ出尽きぬ本牧に「花街もあつた」と大真面目の人

梅ジュース今年は漬けるの止めたのと啖きて「リハ紐」を編む人

「帰るんだ」と駄々こねる人の朗らかな寅さん啖呵売の口上

スニーカーも双眼鏡も未だわが手元にありてリハビリの日々

近藤栄昭

夏日本海

・虹

シーフォームブルーに透きいる日本海波は静かに船影ゆれず

降る光海に入れば海の色肌はブルーに血の色消えて

息を吐き沈む静かに海底へ小石ぶつかる音遠く鳴る

つま先を真っ直ぐに立つ海の中床板の色ウルトラマリーン

息を吐き浜辺へ寄せて砂丸め左へ走り泡と消えゆく

大波が磯部に海草縋り送り浜に盛りたり海の排泄

背焼けて皮膚が剥けゆくじりじりと泡流れゆくうぶ毛に触り

近藤芳仙

横須賀

・信

佐久間辰

野の花

・湾

検査ひとつ終へて歩める横須賀の街ふく風は海のにはひす

米軍の基地ある街の遠近に横文字・英語の看板多し

湾内を埋める軍艦何十艘 鉄紺色にあたりをそめる

鎮守府の置かれし港 米軍の基地のある街 我ら知るべし

名物のひとつとなりし海軍カレー横須賀にきて味を楽しむ

特長は野菜・果物によるトロミ海軍カレーの甘さ上品

ウインドーに橘媛の切絵見る入水に波を鎮めし媛の

君が骨君が手に抱きて納骨す雨上がりたる五月の朝に
君遣す手作り葉君遣す本に挟みてほつと思つぐ
汝が息子死せりと未だ告げ得すて遠くの姑に花鉢おくる

君あらぬ君が生まれ日過ぎてゆく今年は梅雨のはや来るという

「掃除より僕の話を聞いてくれ」キリストのごとき君でありしよ

山の上京を見下ろすこの墓地に眠り給えな吾もいつの日か

微笑んであなたが迎えに来るのなら死ぬのはそんなに怖くないかも

坂出裕子

コロナ

・洛

ひとよ静かにふり返れよと神様の賜ふ時間かコロナ禍の日は

外つ国を旅したる日は遠くなりコロナのあらぬ前世のごとし

ユトリロの跡を求めて歩きたるコタン小路をたどる画集に

ざりがには採れたらうかマスクして川へ遊びに行きたる孫は

庭にいま咲いてゐるのは何の花 電話で聞きぬ外つ國の娘が

コロナ禍の日々にはあれどガラス戸の向かうに紅きつじが笑める

データーとジュリアンの鉢庭に出し光を当ててひと日はじまる

佐久間辰

野の花

・湾

教え請う人亡き今はただひとり信するままの歌作る日々

あの頃は良かつた日々よ師の居りて虚しき時は直ぐに質せしに

思うだに厳しき世界よ歌びとの日々の思いは数知れずあれど

事ごとにつまらぬ世界と思うだに野の草花の何とうるわし

みちのくの歌枕など旅せんと思えど空し体は利かず

その昔榮え続けし絶文文化の跡形も無く寂しみちのく

なにゆえのこの衰えの哀しさよみのくは常に奪わるるのみに

佐藤道子 薫り

・甲

花ときの五月にさつきは散り果てぬ異常気候が日常となる
マスクの街の雨に散り敷き桐の花うす紫のやさしさ匂ふ
人と人のつながり薄くなる町に散歩の犬が尾を振りて来る
ごみの日の朝鴉は網を開け麺のかたまりいそいそ呑へる
み社の裏のほそ路蒸り立つ土見えぬまで敷く樟の花
み社に見上げる楠くすの花コロナの街に凜として佇つ
四十雀小綏鳴うぐひす朝の道鎮守の杜に五Gは届かず

篠原まり子

五月の薔薇

・羊

友は逝く五月の薔薇の咲く時に永久に届かぬ薔薇の便りは
白内障術後思わず眼裏に五月の薔薇の映る愛しさ
サイレンは暫しを絶えて不気味なる静けさ襲うコロナの数値
コロナ禍の命思いて覚えたる逼迫自肅幾度か書きて
人の気配なき公園の逝く春にマスク外して緑の風を
トリアージ当然なるかわが命会わず語らず今日を生きいて
ベランダのサニーレタスも役目あり朝の四五枚小鳥とわたし

柴田登志恵

仮寝の形

・天

術前の検査に知りぬ突然死リスク不整脈なりし君とふ
突然死悪くもないぜと言ふ君の下手の戯言いよよますます
スタッフのコロナ感染に手術室閉ぢられ君は延期告げらる
点滴台片手に向かふ手術室広き君の背すこし強張る
親族とふを持たぬ気楽さ雲と待つ君が手術の終る長きを
お待ちどほんぞ言ひつつストレッチャーに手術室から出で来し君は
雨あがり雲ふんはりと青空にあまたの猫の仮寝の形

鈴木結志

原発トラブル

・福

高濃度汚染水三〇〇トン流水事故を東電みとむ
原子炉の交流電源喪失の不祥事みのがしゆるしてならじ
原発の連続トラブル電源系統弱性の改善のぞむ
東電のトラブル隠し発見に重ねてデータ改ざん相次ぐ
核燃料溶け落ち発生東電は想定外と交わして逃げる
一連の原発不祥事東電社長原発立地の長らに謝罪
素粒子を使いデブリを把握する技術改革研鑽称う

関根栄子

マスク

・埼

梅雨入りの宣言はまだ早々と半夏生の葉の白くなりゆく
うたたねの始まるわれか直立で眠るアザラシテレビに映る
水出しのコーヒー片手にベランダで皆既月食を待ちいる時間
馥郁とジャコウバラ咲く垣根道散歩のコース変えれば出会いう
マスク同士の会話にいつか目の動き探るくせなどわれはつきしか
もうよしとマスクをはずす白々と花ニラ咲ける隧道となる
無観客の五輪なんてありえない 電車の中で小耳にはさむ

閑根和美

水塚

・埼

配られしハザードマップに見るわが家水は二階におよぶと記す
利根川の決壊あらばの予想図は地獄絵のこと巻りつぶさる
木の船の吊られてあるを他人事のように見ていく姉家の小屋に
水塚はも過去の遺物のごとわざか利根川へゆく道の辺にあり
二時間のうちにいすこへ逃げよとヤシミュレーションする浸水の町
城跡に陣屋あとなど高台にあるも道理と今にうなづく
竜巻の予報のつづくこの二日入道雲がもくもくと湧く

高 尾 恭 子

かたち

・大

（55-1）の赤い袋をぶら下げる人それぞれに家族のかたち

豚まんは仄かに温し大切な時をうるうる速回りして

通り魔に一度見されたか陸橋に仁王立ちして逃げ道さがす

スイーツの（映え）をもとめる列ながし緊急事態宣言早朝

落ちてなお形くずさぬ敷つばき夕暮れ時をはんなり赤し

まつさらな縁に季はめぐりきて縊りし青年のほほえみ映す

眠られぬ夜々をかさねて紫陽花のよひらを濡らす雨しずかなり

高 津 砂 千 子

菖 蒲

・風

むらさきのしめり具合がふさわしき菖蒲に雨の降りみ降らずみ
板の橋すべらぬようう渡ろうぞそば降る雨の心地よけれど

噴水の放射を描く真昼どき学童の声天をつきぬく
プリンセスミチコとう薔薇もいろの花びらかさねやさしさ醸す

たわむれに拾い始めし梅の実のつきつきあれば草生親しも
雨上がりの草生のうえを低く飛ぶ紋白蝶のひらりひらりと

うつそうと繁る境内たたずめはつか聞こゆる細き流れの

滝 田 靖 子

郭 公

・新

隣家の新築工事の音高し休日もかく働く人ゐて
看護師になりたいと言ふCMにその都度やめとけと声かけてゐる

雨降ると見上げし窓の外は闇雨はわたしの胸に耳に降る
ざあざあと耳鳴りやまぬ一日を働いて働いて働いて眠る

死してすぐ掃除されたる病室に死にさうな人また入院す
郭公の声を聞くたび郭公の初音歌ひあなたを想ふ

郭公の声少しづつ遠のきてざあざあとまた耳鳴りがする

竹 下 妙 子

刻を紡ぐ

・霧

寝たきりの替りのことば寝隠りと言ふは優しかりさみだれの夜
小鳥らの巣籠りとふは愛しかり五体疼く身は刻を紡ぎて

口しづく指しづくして桃食めりをさな児のことタオルを巻いて
ドクダミの夜の花々に音もなく稻妻十字にあかりを灯す

草のうへ落ちし梅の実やはらかく去年漬けたは思ひ出のなか
バケツ揺れ遅れてゆる中の水 水のやうなり吾が心とは

夕映は兆さむとして午後六時霧島山は夕陽をまとふ
漆黒の葉巻型UFO夜の間に紛れてたり小四の夏

田 土 成 彦

霧

身につきしかなしととして口すすぎ入れ歯をいれる朝のならひに
マスコミをマスゴミといふネットには報道されない記事が満載

海藻を摘みし細文の商なれば若布を今日の汁の具とする
街灯の灯幅を流れゆく霧のためらふにてまた流れゆく

青インクはどこかうれひを秘めてて今書く歌に似合ふ気がする
連休の五日ばかりをスーパーに一度ほど行きぬ何買ふでなく

染色の道守りたる人の名を吉岡幸雄と知りし喜び
伝統の染色家大和に技を継ぎ宮中の装束なべて染めきぬ

宮中にのみ使われる紫の色あることを知るぞ樂しき
露草のあえかなる花染色の下書き液に摘むとし聞けり

木を裂きて根を煎じ色を生み出せる釜の焰の今も燃えつぐ
冷水に晒す手捌き確として伝統の色密かに生る

水くぐり空気に息をする色の生れしばかりときめきの色

田 土 才 恵

染色家

・宙

玉井綾子 恋の趣

・羊

中島義雄 垂粥

・岡

いざという時に頼りにした君が同僚となり真横に座る
説明が上手な君の横にいてその指の節の太きを見つむ
今までの吾の説明はピンばかりで彼の言葉に輪郭を持つ
席並べ二ヶ月で臨時休業にとりとめのない妄想の浮く
これやこの恋の趣この人をもつと知りたし未婚の訳も
君のあらを探し続けた三ヶ月吾の手のひらに天秤の生う
職場での巡り合わせはこれまでの出会いのガラポン 運命でなし

虎谷信子 拾遺歌

・伴

深き想ひ 城外におく安らぎか。小さき薔薇の 今朝も咲きたり
時雨忌のたなぐもる日 昼の間を、うす紅にうつる 美容に寄りぬ
白き絢似合ふ人あり 恋ひ初め、井戸神まつらむ 供物の色どり
灰色にわがるた・せくすありすほろほろと烈しき戦の日日を経し後
誰・彼と 逝きにし人の手向とも。西日にさらさる背戸のしづもり
紅さんご色なる 葉葵をもきをれば、灯りゆく家 水田にうつる
テレビに映る猫の可愛さ羨しみて、わが家に居つくノラなでやるも

中島央子 さくら餅

・森

拘束に足らはぬ日々の一時を草餅さくら餅かしは餅

なじみ来し駅前通りのアーケード伊勢屋武蔵屋下總屋閉づ

当分の間休業の理由書かぬ小さき茶房のゴールデンウイーク

つちふるや今宵満月赤茶けてこの世の曲物変異ウイルス

花となる力をためて盛り上がる小手毬の白おろそかなならず

これやこのウイルス騒ぐを聞く耳に今宵シャボンの泡をたてたり
子とわれと殊更語ることもなく湯豆腐分けつつ夕餉を終る

耳疎き吾との齟齬も悲しまず垂を摘みきて粥を煮る嫁
暗きより勤めて晩く戻る子へ唄さし港のこときわが家
正岡子規の歌ならねども残業の息子が先づ問ふ吾の体調
酒飲みてみむかと誘ふ者もなく鉄板の上に花蟹踊る
言ひ訳は程々にして蜆汁吹き吹き吸はむ吾に分はなし
二本杖突きて三千歩を歩き峠の田植ゑを見て戻りきぬ
音ひびく十方の雨の中に立ち薔薇啜るひとときの歓

永塚節子 窓

・銀

方形の窓の向こうに揺れる木木梅雨のはしりの空重々し
梅雨時は白い花がよく似合うばいかうつきのていかかずらの
かたつむりブロック屏をわがものに上へ上へと雨上がりの朝
かたつむり十四ほどを見比べるこれは右巻きこれ左巻き
戸袋より飛び出しきたるすめばちと距離保ちつつ身動きならず
久後に降り立つ駅の改札口待ちては五羽の子つばめ
病室の窓の外は青空か夕焼け雲か届かぬメール

仲西正子 シロアゴガエル

・沖

暴風雨の叩く真夜なり一齊に何に哭ぶやシロアゴガエル
こんなにも密みていてか起されてシロアゴガエルの戦慄哭をきく
悪魔の島と呼ばれし時に紛れ込みシロアゴガエルの戦慄哭
眠れぬとシロアゴガエルにぶつけられば尚ぶつける戦慄哭
嘉手納からここに到れる歳月に土着となりしやシロアゴガエル
いつの間にシロアゴガエルの世代繼ぐ空地の隅に熊野菊咲く
熊野菊を刈るか否かと思う間に黄花くきやか蔓延り咲けり

白子れい

毘沙門堂

・洛

浜本美美

高砂ゆり

・夢

さみどりの枝に招かれ石段を登りて詣す毘沙門堂に
常日ごろの感謝込めたる金封を渡せば階段上りこちらと
新しき門跡さまのお披露目の式なず御堂に案内されたり
お御堂は読経の声のあふれおりその一隅にわれ導かる
比叡山その他の寺より集られし坊さま溢る御堂の中は
式典の終りてめぐる境内のひと葉一葉が光とあそぶ
九十余年生きて初めての経験を噛みしめ噛み締め帰る疏水辺

ばかりようこ

あさあさを

・鹿

エンピツは消しこむつきで書き手帖わが旅だつ日には持たせて欲しい
春のかぜ昂り吹けり木や花を平伏させて主役となりぬ
あさあさをイモ虫とわから青き葉一枚ずつ食み冒の腑を染める
誇る言葉は一方的に聞くでない右の耳から左に流そ
タンポポの綿毛いましも放たれん有終の美の刹那の汝の
家盡なるか丑三つ頃にきしり鳴る家のどこかで歎軋りの如く
六月は奇なる月なり暮い上げしお人らの忌わが生れし月

浜谷久子

声

・地

相次いで大切な人の亡くなる年会えないことの暗さがつのる
その子らや伴侶の哀しみいかほどと庭の白百合まだ固いまま
コーヒーの熱さが救いやつくりと時間をかけて椅子にとどまる
うたた寝の束の間母の夢を覚め声の続きを聞こうと見わたす
知らず知らず静かになっていく日々はわたしと巡りの齡とともに
右足は母似左は父に似る気付くある日は古稀過ぎるころ
門灯の滲む温とさ家のひと日の無事を告げる灯であれ

高砂ゆりささやくごとく開きたり空もようあやしき台風の前
長曾我部の紋所とうかたばみの花に佇みはや疎みたり
高砂ゆり名残りの長きしへ一本花びらありたるままに吹かれつ
明石と言え明石靖よと言いながら燃える監督の面わみていつ
高校野球九回の裏の一点に望みをつなぐ投手の気迫
青春の一ページにきざむくやしみのその涙かみしめてゆけ
洗濯物干しゆく手元夏蟬の終の雄叫び青く響きぬ

檜垣美保子

蔓

・昴

あまきりの消えゆくあさのときのまをほそくしずく雨だれの音
遣蓋碑に水供えられたわらのカイズカイブキはみどりのぼむら
ガス管をゆるく巻き締めのぼりつめ零余子の蔓のよるべなきま
Tシャツのその色は何と問うばはに夕焼けの色ときょうはこたえて
意味なさぬ「あ」を声にして叫びたり惡意のあとに見えぬ青空
六月は花まだ咲かぬ屋顔蔓と蔓と風からみあう
花おわり実をむすぶなずな一面のかがやくなかに雀の地鳴き

福田庸子

早朝の森

・今

ひとこゑののちのじしまを身に添はす早朝の森に鶯と我
杉山をほどろほどろに粧へる山藤の波風を仰ぎて
己が声ますます上げて睥睨し森のじしまを打ち破る鳥
主義主張絶めるなく放つ隣国は画眉鳥すらもけたましきよ
アメリカの放送権ゆゑの五輪なり酷暑開催を決めしは彼の人
アマチュアの祭典は過去より商業主義を振りかざす五輪は世界を回す
便利さを求むるばかりへの鉄槌に生き延びらるるか若者達は

藤田美智子

にはかの雨

・新

久我田鶴子

合鍵

・羊

会合のたびに連絡先書かされて個人情報転がりてゆく
入院のかなはず過ぎし人もあり死者数といふ（すう）の軽さよ
言伝て聞く消息に浮かびくる泣くまいとしてゆがみるし顔
一ミリにも満たざる虫を見つけたり黒き斑点出でし葉裏に
貰めたてしことばがわれに戻りくるにはかの雨が地面を叩き
丸き背が夜の空気をかかへるジャズピアノ曲低く流れて
闇ふと意志を固めてゐるならむやさしき言葉はかけずにおかう

藤森巳行心柄

・銀

何かあれば青菜に塩ね妻は言ふ塩振りかけるのはいつもお前だ
現代に失はれし言葉心柄大事な心の品格表す

心柄心の品格磨くのは透徹したる信仰心なり
心柄磨いて生きる人生を人間革命と師匠は教へぬ
心柄良い言葉なり我が歌も心豊かに言の葉紡がむ
人類の生存かけた分水嶺三十年後になると識者は
温暖化水に食料人口増渦巻く不安地球といふ星

船田清子青きあぢさる

・天

「ふるさとは遠きにありて思ふもの」 同じ思ひに落ちしにや
人も村も浜もすでに変はり果て汝がふる里は見知らぬ異境
無縁なる落人の里のドラマ果て君が嘆きのふとわが心に

二十日早き今年の梅雨のさきはひに南天の花芽あまた昇り来
鉢中に固まりし土を解きほぐし肥料たつぶりほしいね 南天

この夏はシルバー・カー押しホース持ちしつかり水をあげるね 南天
雨に濡れぼつてり青きあぢさるに逢ひたし君と二人並びて

あからさまをそつと避けつづはづされてコヨーテバンド聴くるわわれ
見上げると見せてしまふ傷 包帯を巻かれるし日の月光仮面
脾液が洩れれば己の溶かされてヒトの身体の仕組みいまさら
合鍵を渡されたるは手術前ひとり暮らしの友に呼ばれて
検査にて見つかりしもの取りのぞき瘦せるし友のさらに九キロ
種を蒔き育む余裕もたざれば今年は朝顔あきらむと言ふ
種時けど芽の出ぬ鉢に水をやる種の機謙を考へてゐる

